

■ フォト・エッセイ ■

北京南駅

—— 陳情者たちの遠い夜明け ——

写真・文
柴田のりよし
Noriyoshi Shibata



朝7時、最高人民法院（最高裁）の陳情窓口には200人以上の陳情者が列をなす

天安門から南へ車で二〇分ほどにある北京南駅周辺の「直訴村」に関心を抱き、三年前から五輪直前にかけて何度か取材したこの地区は、最高人民法院や国家信访局の陳情（中国語で「上访」）受付窓口があることから、地方からの陳情者たちが多く集まる。しかし、五輪開催前までに行われた「市内美化」、八月に完成した南駅の駅舎改築工事の影響で陳情者たちの生活環境は厳しくなってきた。以前は三〇五元（一元は約一五円）で宿泊できる簡易旅館が集中していて、それが「直訴村」と呼ばれる由縁であったのだが、アジア最大規模といわれる新南駅の建設と周辺の再開発事業でそのほとんどが取り壊されてしまった。現在、陳情者の多くは路上で野宿しているといった状況である。

陳情の原因は雇用問題、医療過誤などさまざまだが、現在の中国を象徴するのは、開発による土地や住居の補償問題だ。地方政府の役人と開発ブローカーが結託し、農地の開発や地方都市の再開発が不当に行なわれている。庶民の側も法律を盾に地方裁判所で争うのだが、司法の独立が望めない中国において勝訴する可能性は非常に低い。「和谐社会」、「親民政治」を掲げる中央政府が、加熱する地方経済の暴走を抑えられない現実がある。

一言に陳情者といっても、北京にいたばかりの新参者から、陳情歴三〇年といった強者までいる。「陳情生活三〇年」と聞



地下道で陳情生活を送る地方出身者たち

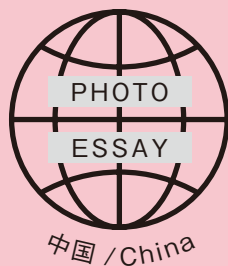
くと当然、生活費はどうしているのかと疑問を抱くだろう。第一に、廃品回収業の末端でペットボトルを拾ったり、関係資料法律のコピー、陳情受付や政治家の住所録）を売るといった商売が目につく。また、古参の陳情者自身が代筆屋や法律相談で稼ぐ場合もある。食糧に関しては、マーケットで野菜くずを拾うという話もよく耳にする。

こうしたエリアには常に私服警官、密告者や地方ナンバーの公安車両が多く見られる。地方の当局者にとっては、陳情活動はマイナスであるので、地元へ連れて帰ろうと地方の公安局員が出張に来ている。世間の注目が集まる国慶節、全人代、党大会といった時期を見計らって、天安門広場で焼身自殺を試みるものもいるので厄介だ。しかし、地方に連れ戻されても何の解決も見ないので、陳情者は何度も上京を繰り返す。そうした長い過程で労働矯正所や精神病院に入れられたという人にも複数出会った。

常に数千人はいると見られる陳情者の存在は反体制の動きに繋がるかと問われれば、答えはおそらく、否である。私が知り得た範囲では、彼らのほとんどは愛国者であり現在の政治指導者を支持している。地元の腐敗した役人たちを糾して欲しい、と願っているだけなのだ。「強権的だった江沢民時代よりも当局の取り締まりは緩くなった」と陳情者から聞いた。庶民に寄り添う温首相のプロバガンダ映像をみて、社会はゆっくり良くなっていると感じているのか



指南書や文具を路上販売する長期陳情者



…。だが同時に比較的若い年齢層には、共産党に対する意識の変化も見られる。四〇代の山東省の農村からやってきた活動家は、連帯を呼びかけるビラを配布していた。党に管理されている農村レベルでの選挙の民主化を求める、とある。また別の黒龍江省から来た三〇代のある男性は、完全に共産党に対する信頼を失っていた。「国民党(台湾)が中国をやっつけてくれればいいのに」と小声で話したのが不気味に耳に残った。上から黒く塗り消されてはいるものの、周辺では当局批判の落書きも少なくない。橋げたではペンキで書かれた「打倒共産党」の大きな文字が読み取れた。やはり不満はくすぶっているようだ。

北京南郊外の馬家楼には陳情者を専門に収容する施設がある。当局による「陳情者狩り」が不定期に行われており、強制的に大型バスに乗せられ施設に拘束される。インタビューに答えてくれたある長期陳情者の話では、この収容施設では電気棒などを使った暴力が日常的に行われているという。五輪前には外国記者との接触を恐れてか、そうした「陳情者隠し」も加速した模様で、陶然橋のもとに住む陳情者の群れを無理やり連行しているのを目撃した。警官の求めに半ば諦めた表情でバスに乗り込む人もいれば、寝転んで抵抗する人もいる。長期陳情者はたいてい中高年や老人で、警官は若い。丁寧な口調ながらも抵抗する者には権力をちらつかせ、バスに乗せていた。バ



バスで陳情者を収容施設に連れて行く公安関係者。時折こうした「手入れ」が行われる

スは一見普通の路線バスにカモフラージュされているので、よく観察しないとそれとは分らない。後日、馬家楼収容施設の門前を訪れたが、陳情者を乗せた大型バスと地方の公安車両がひっきりなしに往来し、異様な光景だった。

長期陳情者の一人に天安門、中南海といった政治中枢でのデモ活動について尋ねたところ、「庶民の苦境を胡主席や温総理に訴えたいだけなのだ。決して騒ぎを起こすためではないのだ」と明快な答えが返ってきた。確かに彼らの不満は地方官僚に対してであり、直接中央の政府に向かわないような構図が出来上がっている。それは抗議ではなくあくまで直訴なのである。しかし、天安門事件を例に出すまでもなく、不満の標的はいつ党中央に向かわないとも限らない。現指導体制も既に六年である。「親民政治」に対する期待が大きかっただけに、変わらない現状に対する失望感も大きい。中国社会は、舵取りが難しい段階に入ったと感じる。

（しばた のりよし／写真家）